
俺だけの記念日・かあさんが泣いた日

ズラえもん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺だけの記念日・かあさんが泣いた日

【Nコード】

N4603E

【作者名】

ズラえもん

【あらすじ】

戦争でたった一人生き残った母、俺を生み貧しくとも必死で育て上げてくれた・・・一度も涙を見せなかった気丈な母の涙。なぜあの日かあさんは・・・？

岡山県の片田舎にある小さな建設会社。

やくざ者だった俺がかたぎとなり10年ほど前に始めた会社だ、事務の女性2人を含め8人の従業員がいる。

商才の無い俺に文句も言わず、みんなそれぞれによくやってくれている！

そんな従業員たちも今日は日曜日で誰もいない。俺は接客用のソファーに寄りかかり、壁にかけられたカレンダーへと目を向けた。
・・5月30日に赤い丸印がつけてある。

毎年カレンダーを掛け替えるたびに俺が書き込んでいるものだ！

“またあの日が近づいたか・・・” 俺はポツリとつぶやいた。

従業員たちはカレンダーの印に気づくと、決まって“何の日ですか？”なんて不思議そうに聞いてくる。

そんな時俺は“うん！ まあ・・俺だけの記念日ってとこかな・・” てな感じでいつも曖昧に答えてきた。

あれから12年、俺も今年で52歳となった、そろそろみんなに話して記念日に名前をつけてもらうとするか・・！！

1945年（昭和20年） 8月6日、8時15分。 広島市

は人類史上最初の核兵器 “原子爆弾” を投下された。

焼けただけ逃げ惑う人々に追い討ちをかけるごとく、北西に向かつて広がるキノコ雲がもたらす “黒い雨” が辺りを叩き、被爆者の助けを求める声をも打ち消していった！

そんな中家族を失い、たった1人取り残された俺の母 “秋江”（あきえ）もまた地獄のような時代を過ごして来た1人だ、その頃の話が聞かされるたびに、俺の胸は世間の無情さ・・・まるで鬼畜のような人々の振る舞いに打ち震え、幾度と無く涙を流したものだ。

後から人に聞いた話では、母は流れ着いた先で毎日のように闊歩する進駐軍相手に、ひとかけらのパンと引き換えにその身を投げ出したこともあったという・・・さぞ無念だっただろう。しかし頼る者のいない母が生き延びるため、選択せざる終えない道だったのかもしれない！

当時21だった母は顔中にひどい火傷を負っており、そのためか、はたまた戦地でアメリカに命を奪われた夫のことを思っていることなのか、生涯独り身を通した・・・幸いなことに母は縫製の技術に長けており、雨漏りの耐えないあばら家で器用にミシンを扱いもくもくと働いた。

そして11年後（昭和31年）俺がこの世に生を受けたのである。父が誰なのかはわからない！

原爆投下から10数年が過ぎ、俺に物心付いた頃。

世の中は活気を取り戻しつつあった、だがそれでもまだ世間の人々は火傷を負った母の姿を気味悪がり、化け物だとかピカの病気がうつるだとか、好き勝手に陰口をたたき近寄るものはほとんどいなかった。

しかしそんな中、たった一人うちを訪ねてくれる人がいたのである。

それは母に縫製の仕事を持って来てくれる滝村のおじさん、おじさんはいつもニコニコと笑いながら俺の頭をよく撫でてくれた、時には俺のことを集中攻撃するいじめっ子たちを追い払い、わざとやっらの目の前でチヨコレートをくれたりもした！

駄菓子屋においてあるお菓子なんか比べ物にならないほど高級な味がして、俺はやつらに見せびらかしながら口いっぱいにはおぼったものだ。

今から思えば、俺の父親は滝村のおじさんではないのか？

だが、母は俺の父親が誰なのか、俺が尋ねても答えようとはしない！

俺もそれっきり聞かなかった。

あれは俺が9歳の頃だった、母の顔のことでいじめに遭い泣きながら帰ったときのことだ・・・母は俺の手を握り優しく言いました。

「正人」（まさひと）お前は私の子だ・・・負けたらいけん、卑屈になったらいけんよ。みんな辛いんじゃない・・・みんな苦しんだりんじゃない・・・じゃけん、他人にやさしゅうする心の余裕なんぞありゃあせんんじゃないけん。そんな事で他人を憎むということは自

分の価値を下げることになるんで。　　かあさんはお前に強くて思
いやりのあるやさしい子に育ってほしいと思ってる。」

そう言うと母は俺の顔を覗き込み、エプロンで涙を拭いてくれた。

「どんなにいじめられても負けずにがんばるんよ、そしたらいつか
きつと報われるけん。いつかきつとわかってくれる、お前に罪は無
いんじゃないけん。それと、母さんは顔のことなんか気にしとりやあ
せんよ！　見てくれよりも心の持ち方じゃ、どんなことがあっても
他人から後ろ指を指されるようなことをしたらいけん！　そうすれ
ば胸を張って生きられる大人になれるから・・・母さんが保障する
けん・・・！」

そう言つてニツコリ笑う母の目にはやさしさが満ち溢れていた。

「偉い人にならんでもええ、母さんはお前に心にゆとりを持っ
て、他人の気持ちがわかる大人になってほしい！　いつかお前が
大人になって生活に追われたとしても・・・毎日真っ黒になってへ
とへとに疲れても、その日一日を振り返る心の余裕をもって、床の
中で目を閉じたとき自分が朝ごはんに何を食べたかちゃんと
覚えられる大人になってほしい・・・そうじゃなきゃつまらんじゃ
る？　１日自分が何をしたかも忘れるようじゃつまらんじゃるっ？」

事あるごとに母は俺にそう言っていた。

“どんなことがあっても他人から後ろ指を指されるようなことをし
たらいけん！”

母の口癖だった、俺は母の涙を見たことが無い！

どんなことがあってもいつも笑っていた。 どんなことがあってもめげない気丈な母だった……

昭和49年、俺は18歳となり夢と希望を胸に抱き就職のため神戸へと旅立った……

……しかし、そんな夢は見事なほどに打ち砕かれたのである。

俺の生活は荒れ果て、仲間たちに誘われるまま当時勢力を強めていた暴力団“藤間組”（とうまぐみ）へと籍を置く羽目に！

もちろん母は知らない。 手紙には建設現場で元気にやっているとだけ書いた。

藤間組での俺は見る見るうちにその頭角を現し始め、25歳を迎えた頃には組長の右腕と呼ばれるほどの地位を確立していたのである！

“どんなことがあっても他人から後ろ指を指されるようなことをしたらいけない！”

そんな母の言葉をことごとく裏切った俺の人生だった……！

俺は母を騙し続けた、そして俺が30になったとき、知人の紹介で岡山の田舎に家を建て母は広島から岡山へ……顔の復元手術も

勧めたが、母は拒んだ。

俺は月に数日だけ母と過ごし、また神戸へ・・・しかし、神戸では暴力団同士の抗争が相次ぎ、俺は母をたった1人で岡山に残したまま神戸の地を離れられなくなっていった！

そんなこんなで10年の歳月が流れた。

母からの手紙・・・それがいつの間にか俺の楽しみに変わっていった。

母の手紙に書かれていた “ 休みが取れたら最上稲荷に2人でお参りに行きたいねえ・・・ ”

その一行がなぜか俺の心に焼きつくように残っていた。

そんなある日・・・知人から母危篤の知らせが入ったのである。

浴室で足を滑らせ頭部を強打したらしい、俺は母の元に飛んで行きたかった、だが時期が悪かった！！

ちようどそのころ、血で血を洗う縄張り争いが続き、俺は組長の片腕として神戸を放れるわけには行かなかったのだ。

母はなんとか一命を取り留めた、しかし、世話をしてくれている知人からの連絡によると、長期の意識不明状態と薬の副作用からパーキンソン病を引き起こし、自ら食事を取れず点滴だけで命をつないでいるらしい！！

そこに持ってきてきて認知症を併発したらしく、横になっただまま一日中

ぼんやりと一点を見つめていることが多いそうだ。

そして、やっとの思いで俺が病院に駆けつけ、病室のドアを開けたとき、母は俺の顔を見てニッコリ笑った。

やせ細り変わり果てた母の姿に俺の胸は張り裂けそうだった。

「かあさん！！　すぐにこれなくてごめんな・・・！！」

横たわる母の枕もとの椅子に腰を下ろし、点滴で黒ずんだ母の手を握った俺は、あふれ出る涙をとめることが出来なかった・・・そんな俺を母は心配そうに見つめていた。

そして、俺の顔を見た母から衝撃的な言葉が発せられたのだ！

「どちらさまですか？」

キョトンとした表情でそう言う母に対し、俺は言葉を失っていた・・・！！！！

“どちらさまですか？”　・・・認知症とは聞いていたもの、まさか実の母親の口からそんな言葉が出ようとは！！

俺は一瞬目の前が真っ暗になり、気が付くと定まらぬ目線でにこやかに笑う母を力いっぱい抱きしめていた。

翌日担当医から回復の見込みが無いことを知らされた俺は、いつかの母の手紙　を思い出していた。

“休みが取れたら最上稲荷に2人でお参りに行きたいねえ・・・”

俺は病院の反対を押し切り母を連れ出した。レンタカーの助手席に母を座らせ、一路最上稲荷へと……

車の中でじつと目を閉じたままの母に、俺は何度も話しかけた。

「かあさん！　ほんとにごめんな……寂しい思いをさせてしまつて……かあさん……俺のことがわからないのかい？　思い出してくれないのかい？　俺だよ……母さんの息子の　正人だよ！」

俺が何度話しかけても、母は薄目を開け小さくうなずくばかりだった。

最上稲荷へ着くと、常店の立ち並ぶ長い階段を小さくなった母を背負い、俺は一步一步踏みしめながら上つて言った。

「ほら！　かあさん見てごらん、あんなに大きな招き猫が俺たちを呼んでるよ。」

……

「あとでおみくじでも引いてみようか？」

……

「あっ！　ほらむこうに仁王門が見えてきた……」

……

俺は肩越しに振り返り、答えぬ母にしゃべりつづけた。

これが今の俺に出来る精一杯の親孝行だと信じて……

本殿へ向かう階段に差し掛かった頃には、俺の脚は疲労のためガクガクと震えていた。

それでも力を振り絞り、何とか本殿の前にたどり着いたとき、俺の背中で異変が起きた……母が身を起こしたのだ。

「か・かあさん!!」

母はしつかりと目を開けていた！
そして俺の顔を見てやさしく微笑んだ。

母の口が動いた……

それは、油断すれば聞き漏らしそうなほど小さな声だったが、それでもはつきりとした口調で言った。

「……正人……正人じゃね？
ありがとう……母さんは幸せだったよ……正人が母さんの子で……」

突然の母の言葉に俺は涙が止まらなくなっていた。

「かあさん……かあさん……俺が……俺がわかるんだね？
かあさん……」

母は続けた。

「正人・・・こんなに立派に育って・・・それでも母さんから見れば
まだまだ子供じゃ、これからもどんなことがあっても他人から後ろ
指を指されるようなことをしたらいけんよ！　ほんとにほんとに
・約束じゃけん・・・」

言い終わると母はそのまま息を引き取った！！

「か・かあさん・・・！！」

俺の呼びかけにも母さんは二度と目を開くことはなかった。

俺は母の亡き骸を背に境内を歩いて回った。顔中涙でびしょびし
よにぬらし、参拝客が振る返るほどの嗚咽を漏らしながら！！

車に戻り母を背中から降ろした俺は、安らかに眠る母の目に光るも
のを見た。

気がつく俺の背中には母の涙でグッシヨリと濡れていた。それは
俺が生涯で始めて目にした母の涙だった！！

初めて目にした母の涙で、俺は自分が思い違いをしていたことに気
づいたのだ！

”俺のしていることは親孝行なんかじゃない・・・かあさんはこん
なことをしてもらいたいんじゃない・・・！”

俺は心の中で誓った。

やくざな世界から足を洗い、母にふさわしい息子に生まれ変わると・
・
・

5月30日・・・かあさんが泣いた日。

初めて母を背負い、その優しさと温かさに包まれて、この俺が生まれ変わった日

それが今の俺にとつてもつとも大切な記念日なんだ！！

俺には今でも母の言葉が聞こえて来る！

“ 正人・・・朝何を食べたか忘れんよう、いつも心にゆとりを持つんだよ。それから絶対他人に後ろ指さされる事だけはしたらいいけん！！”

遠くから聞こえてきた車のクラクションの音でふと我にかえると、開け放たれた窓から心地よい春の風が吹き込み、見つめていたカレンダーを揺らしていた。

俺は椅子から立ち上がり、窓の外を見た。

背中を丸めたお婆ちゃんが、手押し車を押しながら歩いている。

最近、そんな何でもない光景でさえ、俺の胸に熱いものが込み上げる。

“ 俺も歳を取ったんだな・・・！！”

そんな事を考えながら、俺は窓に近寄り思わず叫んでいた。

「ばあちゃん！ え〜え 天気じゃなあ〜 この辺も車が増えただけ
ん、気いつけにやあ

いけんで〜
」

ばあちゃんは俺の顔を見て頭を下げ、ニッコリと微笑んだ！

その瞳にはあの日の母と同じ優しさが満ち溢れていた……！！

おわり……

(後書き)

親孝行したいときには親は無し・・なんて言葉があります。私自身が親になり最近感じた事、親孝行とはいったい何か？ 親に対して何かをしてあげること？ 私は違うような気がします。 親は子供から何かを求めてるでしょうか？ 求めてるとすれば、平凡でも良いから元気で幸せな生活を送ってほしいということ。そして本当の親孝行とは、決して親より先に逝かない事・・ではないでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4603e/>

俺だけの記念日・かあさんが泣いた日

2011年10月5日00時37分発行